

日本有数の豪雪地帯

長野・新潟県境の秋山郷

秋山郷に行ったのは今度で3度目。最初は信州にUターンする前、死んだ養父の運転だったから、もう20年ほど前になる。

2度目は社会部OBの岡田優さん夫婦と一緒に、10年ぐらい前だが、帰りに野沢温泉の「さかや旅館」に宿泊。3万円の部屋を1万7千円にしてもらった。2度とも秋山郷の入口付近で引き返したので、いつか奥まで行きたいと思っていた。今回、皆さんのおかげで実現できました。

秋山郷がある長野県側の栄村や新潟県側の津南町は日本有数の豪雪地帯。12月3月には毎年2メートル前後の雪が積もり、平成17年豪雪では4メートルの積雪を記録した。

同じ豪雪地帯の塩沢が生んだ、江戸時代の文人、鈴木牧之の「北越雪譜」には毎冬、雪に閉じ込められる生活を余儀なくされた人々の苦難が描かれている。牧之は秋山郷にも足を運び、「秋山郷紀行」を書いていますが、今は出版されていない。

栄村は2011年3月12日、東日本大震災の翌日、震度6強の地震に見舞われた。被害がひどかったのは村役場などがある中心地で、秋山郷はほとんど被害がなかった。今回の旅で被災地も訪れたかったが、幸いほとんどが復旧、見た目には被災地らしい光景はないので旅コースから割愛した。

帰途、奥志賀に向かう途中に通過した切明温泉には川原を掘るとお湯がわき出るところもある。皆さんが元気なうちに、いつかまた行きましよう。(荻原 莞二)

「雪九月末より降りはじめ(略)五月にいたりて消える。されば雪中にあること凡そ八ヶ月、全く雪中にこもるは半年也。ここを以て家居の造りはさら也、万事雪をふせぐを専とし、財をつかい、力を尽くすこと紙筆に記しがたし」

鈴木牧之の「北越雪譜」から

「初雪の積もりたるをそのままにおけば、再び降る雪を添えて一丈にあまる事もあれば、一度降れば一度掃う。これを里言葉で雪掘りという。掘

らざれば家の用路を塞ぎ人家を埋めて人の出べき処もなく、幾万斤の雪の重量におしくだかれんをおそれるゆえ、家として雪を掘らざるはなし」

十五ヶ村をなべて秋山と呼ぶ也。(略)里俗の伝に此地は大きく、色欲に薄く博打をしむかし平家の人の隠れたる処といふ。(略)牧之、文政十一年九月

八日、秋山にたずね入りぬ。(大略)此地の人、上食は粟に稗小豆を交ぜて喰ふ。下食は粟糠に稗乾菜などまじえて喰ふ、また栃の実を食とす。(略)秋山の人はすべて冬も着るままにて臥す。嘗て夜具といふものなし。(略)

此地の人すべて篤実温厚にして人と争ふことなからず、酒屋なければ酒飲む人なし」(荻)



閉鎖が決まった共同軽井沢保養所前で

薄れる上州時代の記憶

「おきりこみ」にがく然

世界文化遺産に登録申請している富岡製糸場を見学中、突然の通り雨に見舞われた。肝心のレンガ造りの工場群の見学を省いて早々と退散、製糸場前のうどん店に駆け込んだ。

◇上州での疎開生活

富岡製糸場には操業していた時代に社会見学で高校

の仲間と訪ねたような記憶もあるが、定かではない。小学5年から高校卒業まで疎開先の群馬県佐波郡豊受村(現・伊勢崎市)で過ごしたが、夏休みなどにはよく友達と赤城山周辺などを徘徊(はいかい)し、キャンプしながら貧乏ヒッチハイクをした思い出がある。

富岡製糸場には操業していた時代に社会見学で高校

高校時代に富岡製糸場に立ち寄ったとすると、まだ操業中の昭和28年ごろになる。もう60年近くも昔の出来事なので、どうしても思い出せない。当時、群馬県は養蚕業が盛んで、うちのおふくろも自宅で伊勢崎銘仙の機織りをして生計を立てていた。製糸場に来たかどうか、高校時代のアルバムをめくったが、一葉も見つからなかった。

◇おふくろの味

疎開中の食糧不足の中で、おふくろが作る煮込みうどんは、ご馳走だった。小麦粉が手に入らない時代で、日ごろは、ふすまや米ぬかのすいとんが常食。白米などほとんどお目にかからなかった。小麦粉をこねて、めん棒で何回も伸ばしたうどんは、幅広に切ったゆでずに、そのまま煮立つた釜の中に投げ入れたのを覚えてる。

上州育ちのおふくろ自慢の料理だったが、恥ずかしながら、これが「おきりこみうどん」と呼ばれているとは知らなかった。店内で「おきりこみって、どういう意味」と聞いて笑われたが、何とも恥ずかしい。食糧難時代のおふくろの味を思い出す旅になった。(富田 信吉)